

1.

モロッコ革にルリユールが施された『悪の華 Les Fleurs de Mal』1857年の初版本。同書は出版間もなく風俗紊乱で有罪となり、回収。罰金とともに詩の6編が削除。削除した箇所新たなページを挟み込むことで、日の目を見たという曰く付きの詩集。この経緯から完全な初版本は存在しないことになっているのですが、150部ほどが残ったそうです。その初版本を愛書家・気谷誠が入手していました。製本装丁者マルユス・ミシェルによる装丁／ルリユールが施されています。モロッコ革の表紙に裸婦像、その下にボードレールの詩が3行引用されています。『悪の華』は気谷の没後、パリに里帰りしています。気谷誠の書斎で撮影。

2.

『おむすびころりん』小泉八雲／ラフカディオ・ハーン訳。〈Japanese Fairy Tales〉シリーズ中の一冊。長谷川弘文社、おとぎ話や日本の習俗などを彩色挿画を入れ、英語、仏語、独語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語など各国語に翻訳し、外国人相手の土産物として出版。欧文和装本、本の姿は和紙をちりめん風に加工した俗称「ちりめん本」。「ちりめん」とは絹や木綿の表面にシボ(凹凸)のある布。風呂敷等に使われています。造本は挿絵の小林永濯ら江戸の技術を動員しました。

3.

『L'ENCYCLOPEDIE DE DIDEROT ET D'ALEMBERT[F] デイドロとダランベールの百科事典』パリ、1965年版。啓蒙思想家デイドロとダランベールら「百科全書派」が中心となって1751-1772年の20年以上かけて編集された大規模な出版物『百科全書 L'Encyclopédie』から、建築のヒントを与えるためと思われる図版を抜粋した画集。建築機材やユダヤ古代建築、バビロニアとエジプトの骨董品、ベッカー高原のバックス神殿、アテネの廃墟、ナポリのカタコンベなどの、建築装飾のスケッチが25×38センチの本の中に詰め込まれています。

4, 5.

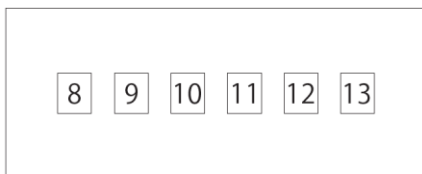
『Plates to Cook's Third Voyage』に描かれた南太平洋の女性。絵には「サンドイッチ島の女」とあります。1778年にハワイ諸島にヨーロッパ人として最初に到達したキャプテンクックは、その島々をサンドイッチ諸島(当地ではすでにハワイと呼ばれていたらしい)と命名。英国王立協会が表向きは天体観測の目的で派遣した小さな艦隊は、南太平洋の謎の南方大陸マラガニア(Terra Australis)を捜し出し、富を得るために違いありません。それを上回る冒険心がクックらを太平洋を3回にわたって航海させたのではないのでしょうか。第1回(1768-1771年)はタヒチ、ニュージーランド、オーストラリアを巡航。第2回(1772-1775年)はヨーロッパ人として初めて南極圏に到達。1776年に出帆した第3回航海の途上、ハワイ島ケアラケクア湾で島民との争いによってクックは1779年に落命。それでもチャールズ・クラークらは北西航路発見の探検航海を続行しカムチャッカを經由、ここでチャールズ・クラークは病死。そこからはジョン・ゴアが率いて帰路は日本の近海を航行し、富士山を眺めたりして南下、レゾリューション号とディスカバリー号は喜望峰を通過して1780年にロンドンに帰還。

6.

『nägärä Maruyam and others: Ethiopian illustrated Manuscript』この本には次ぎのような書き付けが添えられていました。《ゲエズ文字(古エチオピア語)で羊皮紙に書かれた『聖アンナ物語』196 葉、35cm。聖母マリアの両親(聖ヨアキムと聖アンナ)の生涯の物語から始まる聖母マリアが行った秘跡(奇蹟)の書》。手書きで多色の挿絵には布が掛けられています。聖マリアの祝日などに覆いをめぐり祭壇に飾られたのでしょうか。私の洗礼名はアンナで、義父が命名してくれたものです。この洗礼名が気に入っているのです。この本に巡り会った時には、「神のおみちびき」だと思いました。

7.

白い革の手袋を父がヨーロッパ土産に買ってきました。細くてきれいなフォルムと、感じた事の無い柔らかな手触りに、私は喜んで飛びつきましたが指が入りません。家族みんなが試しましたが、誰も無理でした。立教大学図書館・新座保存書庫で細身の指をした司書の女性を見かけたので、試しに白い革の手袋をはめてもらうと、その手にはぴったりでビックリ、重くて大きな本『聖アンナ物語』を支えてもらい撮影しました。シンデレラのガラスの靴のようなことがあるのだと驚きました。



8.

劣化した表紙の革がポロポロと粉状になってはがれ落ちるので、またたく間に白い手袋が茶色になります。どうしたものかと早稲田大学図書館司書のマツシタさんに尋ねると、「素手で構わないので大事に扱ってください」とのこと。そして、本を触る前に手を洗うこと、メモは鉛筆でとること、貴重な本には手袋をしていると指先の感覚が鈍るので要注意で、素手の方が安全なこともあるなどと教わりました。革表紙の劣化を防ぐ為に専用のクリームがあるそうです。書庫での撮影は常に1人で行います。手袋やデッサン用の手のトルソを登場させたのは、本を支えてもらう唯一の助手として、そしてこれらを写し込む事で、本の大きさがおおよそながらも推測してもらうための苦肉の策です。

9.

本の撮影を始めたばかりの頃、早稲田大学図書館の特別資料室の収蔵庫に入って先ず目に入ったのが、書架に包帯とも鉢巻きとも見てとれる格好の本でした。整理ナンバーも無くポロポロに傷ついていて痛々しいとも、優しく手当してもらっているようでもあります。「これは面白いと思いました」。撮影したものをプリントして報告のつもりで司書の人に見せると、「修復に手が回らないのを見られるのは恥ずかしい」というような反応でした。面白がるかと思ったのに。

10.

表紙の芯に使われている素材と貼られた革の伸縮率が異なったのでゆがんでいます。湿度の高い日本では特に注意が必要なのかもしれません。

11.

アンカットペーパーが積み上げられています。美しく焼き上げられたパイのようで、しばし見とれてしまいました。外界から遮断された静かな書庫で撮影していると、時の経つのが夢のようで、昼夜の区別が分からなくなります。アンカット本とは冊子の小口(本の背以外の3辺)を断裁せずに製本したものです。小口を断裁しないので、紙が

【撮影メモ】

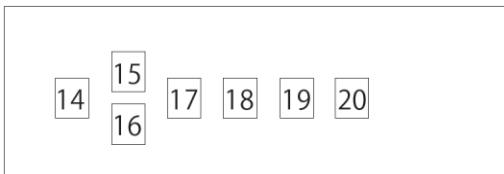
袋状のまま不揃いな小口になっています。アンカット本は自家装幀(ルリユール)のために仮綴じ仮表紙が施されている状態のこと。仮綴じの状態に簡易の表紙をつけて売られている本をフランス装とも言うようです。ペーパーナイフで小口を切り開きながら読み進むことになります。

12.

2008 年の秋。小学 1 年生から辞書を使い始める様子を紹介するテレビが目に焼き付きました。京都・立命館小学校の深谷圭助先生が、文字を習い始めた 1 年生に辞書の引き方を教えていました。子どもたちは身の回りの「モノ」や「コト」を手当たり次第に調べ、調べた言葉に次々と付箋^{ふせん}を貼っていきます。深谷先生に手紙を出しその辞書の撮影の許可をいただくことができました。京都へ行き、2年生の教室で、たくさん過ぎる付箋で 1 年間でブロッコリーのようになった『小学国語辞典』を撮影しました。辞書は付箋で頭が膨らんでいて、まるで子どもたちの頭の中を晒しているようです。子どもたちからすれば、「これだけの言葉を調べたんだ」と実感できる自分だけの辞書なのでしょう。

13.

書名、著者名、内容など不明。同書の耳と小口。手書きの細かい文字がびっしりと、ページからこぼれそうに書き込まれた一冊。本の角が折れているようすを英語圏では「イヌの耳(Dog ears)」、ドイツ語圏では「ロバの耳(Eselsohr)」だと夫が言っていました。彼の高校時代にしおり代わりに目印に、教科書のページの角を「ロバの耳」にしていると、修道士や先生に注意されたそうです。ここまで無惨になってしまうと、オオカミの耳の群れのような恐ろしさを感じられます。今にも崩れそうで、広げて撮影するのを諦めました。



14.

『L'art de créer les jardins[F]庭園芸術』PARIS 1835 年出版。19 世紀にパリで出版されたナルシスヴェルノー Narcisse Vergnaud(1794-1848 年)による、フランス庭園に関する著書。立体的な図版(飛び出す絵/popup book)を挿入するなどして、フランス式庭園の原則を説明し、庭園と花壇を美しい絵を使って解説したこの著書は、後の庭園芸術書に多く引用されました。

しかし著者への尊敬の念は忘れられたままらしく、彼の詳細はどこを捜しても見つけ出す事は出来ませんでした。ただし、啓蒙期から現在までのガーデンアートの歴史研究家/ジョセフ・ディスポツツィオ Joseph Disposzio(アメリカ人)によって、2015 年に同名の英仏両言語による復刻版(英語版名『The Art of Creation Gardens』)が出版されています。

15.

『The Insect Menace 昆虫の脅威』1931 年。アメリカの昆虫学者リーランド・オシアン・ハワード Leland Ossian Howard 著。昆虫が人類の敵に見えて来て怖くなる内容のようです。岡田博士の机の上で撮影。

16.

『The Phylogenetic Classification of Diptera Cyclorrhapha』カナダの昆虫学者グラハム・グリフィス Graham.C.D. Griffiths 著 1972 年。どうやら「双翅目(そうしもく)」に関する内容のようです。この本の所有者だった岡田豊日の自宅兼研究室は、私たちが間借りしていた 2 階の部屋から、庭越しの正面にありました。私たちは博士の家と呼んでいました。夜になっても研究をしている博士が窓越しにうかがえました。博士が打つタイプライターの音が子

守唄のように聞こえていたものです。博士の家からだと思われる赤い目をしたショウジョウバエが飛んで来たこともあります。ガラス戸からの冬の日差しの中で博士の本を撮影しました。

17.

破損した古文書の修補の方法には、和紙を用いて、繕い、裏打ち、漉き嵌め(すきばめ/リーフキャスト)などの方法があります。和書の修復には三桎(みつまた)や雁皮(がんび)を原料としたものが多かったが、最近では楮(こうぞ)を使う事が多くなり、修復には修復する相手と同じ紙を使い、色変化にあわせ黄柏(おうばく/きはだ)で紙を染め分けたりするそうです。虫食い箇所が多く、破損が激しいものは極薄の一枚の和紙を裏から宛てがって補強しています。この修復補強方法は洋書にも有効で、マカオの議事亭内に在った政府図書館の蔵書にも同じような手当が施された、イギリス人が記録したマカオの歴史書がありました。

18.

私たち夫婦と生まれたばかりの子ども穏やかな日々の流れを聞きながら、その絵は茶色に変色した古びた新聞紙に包まれ、一日中陽の当たらない廊下に置かれた、木製の大きな戸棚と粗末な板戸に挟まれて 42 年間暮らしていました。2020 年 3 月 31 日の引っ越しで退室の時に、それは忽然(こつぜん)とドアの隙間から現れたのでした。

19.

島尾敏雄が妻・島尾ミホに隠し続けた「1952 年(昭和 27 年)の日記帳」など。敏雄没後 20 年、泥化寸前の状態で洋服箱に収まっているのを発見しました。義母・島尾ミホの死後、彼女の住んでいた奄美大島の家の片付けを 2 階でしていて、紳士服をしまっておく厚紙の大きくて平たい箱を持ち上げると、いやに軽いので、そーっと開けてみました。見るも無惨に崩れている大学ノートが数冊、何か書いてある原稿用紙のようなものの破片、ちぎれてしまっている手紙のようなものが目に飛び込んで来ました。恐ろしい時間が閉じ込められているような、見てはいけないものを覗いた気持ちに襲われ、私は慌てて蓋をして、階下で作業をしている伸三さん(夫)を呼んだのでした。その中身は、義父・島尾敏雄の 1952 年の日記帳などでした。これらの日記は義父の浮気発覚の原因となったもので、義母が怒って捨てさせたと思われるものです。

敗戦直後の物不足の時代に作られた粗悪な紙のノートなどの紙類が、温度・湿度共に高い奄美大島で、スローファイアー(紙類の酸性劣化)の危機に晒されるだけでなく、雨漏りのする古い木造住宅の天井裏で、台風、カビ、シバンムシ・シミ・チャタテムシ・ゴキブリやネズミなど、シロアリも参加していたかもしれませんが、ありとあらゆる災難に蹂躪されるがままだったのです。まるで紙類受難の見本のようなのです。

20.

シロアリ駆除業の店頭のガラス越しに、シロアリの恐ろしさをお客に知らしめようとシロアリに食い荒らされた本の固まりが飾ってありました。その前を通る度に、店内で撮影させてもらおうと思っているのですが、いつも店は閉じられたままです。と、日が暮れかかった夕食前、そこを通ると店が開いていました。すぐに店内へ入り、食事中の人に撮影させてほしいと申し入れをしました。すると、これから店を閉めるので 30 分以内に撮影を終わらせてくれとのこと。タクシーを拾って、大慌てで近くに住んでいる呉さんに同乗してもらい、丘の上にある定宿の皇都酒店へ取って返し、撮影の道具一式を揃えてシロアリの店に舞い戻ることになりました。事態を把握したタクシーの運転手は、すっかり張り切ってマカオの狭い道路を猛スピードで走ります。呉さんと私と夫はタクシーの中で無言のままカメラにフィルムを装填したり、三脚を組み立てたりと、車の中でカチャカチャと響く機械音は、まるで銃器をセットしながら敵陣へ乗り込む勢いでした。念願叶って無事撮影が終わり、私たちがガリスポア・ホテルの粥麵店へ歩き出す頃にもなると、カジノの電飾が表通りを妖しく眩しいものにしていました。「農科 專業白蟻防治所」で 2010 年撮影。